

かにして長期間にわたって都市であり続けているのか」という問いに対しては、ニジェール川を通して生態環境の異なる北部と南部をつなぐことができる立地にあり、かつ過去から現在まで食糧生産が可能な自然環境にあったことを理由としてあげている。また、ジェンネには性格を異にする集団が共存する伝統を維持する力があり、それが都市としての存続を可能にしているという。「多民族性はどのように保持・再生産されているのか」という問いに対しては、西スーダーンにみられる生業と民族の区分の重複を理由にあげている。また、「どのように都市としての凝集性を保ってきたのか」という問いについては、街区を中心とした政治組織により都市の統一性が保たれており、大規模な定期市やイスラーム教育の中心としての歴史により外部からの求心性が高められているという。

著者自身が言うように「なぜ維持されているのか」「なぜ対立せずうまくいっているのか」を説明することは難しく、その点で本書が冒頭の問いに十分に答えているとはいえないかもしれない。まず、イスラームや市場はそもそもの定義からしてすべての人びとに開かれているものであるため、それだけでは「多民族共生」を支える理由にはならないだろう。ジェンネ特有のイスラームと市場のあり方については豊富な事例があげられているだけに、それらの特徴を簡潔にまとめ、ジェンネ特有の「多民族共生」のあり方とどのように結びついているのかを明示してほしかった。もう一点は、第5章で会合において特定の個人が非難される事例があげられているが、そうした対立の事例をもっと取り上げて、そのなかで致命的なコンフリクトに至らせない仕組みがどこにあるのかを問うような論述のスタイルがもう少しあってもよかったかもしれない。

とはいえ、本書が平易なことばで示す豊富な住民の語りや実践の描写は、理詰めで明晰に論証していくとは異なる形で、たしかに「伝統的都市」や「多民族共生」のありようを、生き活きと映し出しているといえるだろう。

シンジルト・奥野克巳 編

『動物殺しの民族誌』

昭和堂, 2016年, 365 + ix 頁, ¥5,800 + 税

保坂和彦 (鎌倉女子大学)

本書は動物殺しがキーワードであり、第9章を除くす

べての章で、この語句が使用されている。屠畜や狩猟にこの言葉を使うと、いかにも否定的なイメージを刻印しているように見える。第2章、第8章に、ある文化人類学者から動物殺しという表現に違和感を示された経緯が紹介されている。しかし、本書を読み通せば、著者らが、この言葉に託した思いやねらいは共感可能である。屠畜や狩猟が、生きるために動物を殺す行為であるという現実を否めない。むしろ重要なのは、動物を殺さなくては生きていけない現実に向き合っ、日々実践する人たちの世界観や動物観を描き出すことである。そうした営為の結果、見えてきたのは、動物たちとの連続性を意識し、自分たちの存在を定位してきた人間たちの姿であった。狩猟や屠畜から「殺し」を隠蔽してしまうと、むしろ本質を見誤り、極端な場合、人間性の喪失に至る。目下、グローバルに進む動物倫理の普遍化の動きを含め、私たちが真摯に取り組むべき課題がまず論じられる。

第1章「儀礼的屠殺とクセノフォビア—残酷と排除の文化政治学」(花淵馨也)は、現在のフランスで高まるイスラモフォビアが、儀礼的屠畜を残酷とするスティグマ化の動きを生んでいる現状に懸念を示す。特に1930年代のナチス・ドイツがユダヤ人迫害を始めた頃、ユダヤ教の儀礼的屠畜を安楽死の伴わない殺し方として禁止した論理と似ていることを憂慮する。すなわち、気絶処刑を施す屠畜だけが倫理的であるとし、それを行わない宗教的・文化的な他者の排除を正当化する論理である。花淵は、この論理が前提とする合理性や普遍性に対して、強い違和感を表明する。その違和感は、合理化された工場畜産にも向けられる。安楽死や効率性の導入は、屠畜が動物殺しである事実を隠蔽し、動物を「殺される主体」から「処理されるモノ」に変える。動物をモノ化する論理とシステムは、ナチスによるユダヤ人の「動物化」にも転用された。人道的とされた屠畜方法が、効率的な大量殺戮という究極の非人道的行為を生んだ歴史が語られる。

第2章「子殺しと棄老—「動物殺し」としての殺人の解釈と理解について」(池田光穂)は、本書で唯一、直接動物殺しを扱わない章である。池田によれば、人は殺害対象が人間であっても、「他者化した準=人間」として処遇することにより、殺すことが可能になる。本章で紹介されるクラストルによるアチェの民族誌には、3人の子どもが犠牲になる集落内の連続殺人事件が含まれる。3人目の犠牲者である初潮前の少女は、首を弓の背で殴られて殺されたが、目撃したはずの実父は「ヤマネコとして矢で仕留められた」と表現した。殺害者は(少女が胎内にいたとき)ヤマネコの肉を母親に贈与し、本性=ビュクワを授けた「父」であった。じつは当時、彼

らの理論においては、少女の殺害がパネ（狩猟で獲物が捕れなくなる状態）の危機を回避し、豊穡をもたらす唯一の手段となっていた。集団の利益のために、実の親が（半ば予告されていた）子殺しに同意した事実は衝撃的である。殺害直後、被害者であるはずの実父は、愛娘の死を動物殺しに喩え、池田の術語を借りれば、認識論的切断によって、苦難を乗り越えようとしたのかもしれない。

第3章「殺しと男性性—南部エチオピアのボラナ・オロモにおける「殺害者文化複合」」（田川玄）では、家畜の供犠から敵の殺害まで、本書で最も広範な殺害実践が記述される。先行研究における「殺害者文化複合」という概念が人殺しを材料に形成されてきたのに対し、田川は、動物殺し（供犠、狩猟）も構成要素として扱えるのではないかと着想する。ボラナの男性は、ガダ体系やハリヤと呼ばれる年齢組織に組み込まれ、通過儀礼を経て、両性具有的な子どもから殺しの担い手としての男性性を獲得した大人へと成長する。例えば、第三階梯クーサへ移行する通過儀礼の最後には、世代組の代表者が集落外の特別な木の下で、大人期の始まりを意味する種牛の供犠を行い、肉は世代組内部で分配される。また、ボラナの男性にとって、猛獣の狩りは戦いにおける敵の殺害に匹敵する男性性を誇示する行為と見なされる。

第4章「狩猟と儀礼—動物殺しに見るカナダ先住民カスカの動物観」（山口未花子）は、狩猟民カスカの狩猟に同行し、狩猟者が動物殺しをする際の心の動きにも注目しながら参与観察した経験を記述する。山口はまず、カスカの人々が動物を殺す際に何も感じていないように見えることに対し、本来は感じている心の痛みを感じさせない仕組みが儀礼に見出されるかもしれない、という作業仮説を立てる。彼らは、毛皮を売するためテンヤオオカミなど肉食動物を殺したときはほとんど儀礼を行わないのに対し、肉を食べるためヘラジカなど草食動物を殺したときは必ず儀礼を行う。動物と人間は原初において同一であったという世界観をもつカスカにとって、肉を得る狩猟は、動物が身体を差し出してくれる贈与であり、人間は儀礼によって感謝の気持ちを返し、動物の再生を促すことによって、両者の関係性を維持しようとする。特に、狩猟した動物を調理するときは必ず「目玉をくりぬく」儀礼を行い、（集合体としての）動物たちに配慮を示すことによって動物殺しを正当化するという。先述の作業仮説にも関連し、印象的な解釈である。

第5章「毒蛇と獲物—先住民エンベラに見る動物殺しの布置」（近藤宏）は、持続可能性を謳う森林伐採など、外来の自然保護思想に触れる機会が増えている中米パナマの先住民エンベラが今もなお維持する、森を徘徊する異質な身体を持つ諸存在との関係性を記述する。特に、

霊的存在ハイ（＝病気の原因）、毒蛇（＝死の危険）や獲物（＝狩猟の機会）との遭遇を説明する運—誘惑の概念が鍵となる。エンベラは、獲物やハイとの遭遇も、人間の側の魅力が影響していると考える。さらに、動物もハイも自律性を備えた存在であるため、運・不運も影響して遭遇に至る。狩猟や蛇殺しを実行するとき、動物の主（＝森の動物管理者である霊）との関係悪化を恐れる者はいない。南米低地先住民の民族誌に見られるような、殺された動物が復讐するという病因論はエンベラには認められない。毒蛇やハイのような制御不可能な危険を含む異質な他者との共生に自らを位置づけるエンベラの思想は、動物殺しに自制を求める自然保護思想と両立しがたい。

第6章「森と楽園—ブラガの森のプナンによる動物殺しの民族誌」（奥野克己）が描くボルネオ島の狩猟民プナンのヒゲイノシシなどを獲物とする狩猟は、じつに野生動物による狩猟に似ている。最終段階で効率的かつ洗練した猟具を使用するという点を除けば、野生動物が行なう狩猟とはほぼ変わらない。まず、朝方、森に出なければ食糧がないところから共通する。さらに、足跡、音、臭いなどフィールドサインを手がかりに歩き回ったり、獲物が現れそうな場所で待ち伏せしたりして獲物と遭遇する手順は、動物の狩猟を記述しているかのようだ。野生チンパンジーの研究者である評者は、森の中で離合集散して遊動する調査対象との遭遇から始まる朝のルーティン活動を思い出した。日々繰り返した待ち伏せ経験は、奥野がプナンの狩猟を説明するため援用した「虚環境」「形式」「パースペクティブ主義」という難解な概念の理解を助けてくれる。ここで描かれる狩猟とは、一方的な追跡ではなく、森の一斉開花・一斉結実や対象動物の習性を熟知した上で、自分と森と対象動物を天空から見下ろす鳥のような存在として捕食活動することである。プナンの狩猟者がそのような高みに達した人たちであるならば、森の中でチンパンジーを探し回ったり、待ち伏せしたりする研究者も同じ高みに到達することに憧れる存在といえるかもしれない。

第7章「供犠と供犠論—動物殺しの言説史」（山田仁史）は、史学的見地から供犠論の混迷した系譜を紹介しつつ、動物殺しを考える上で供犠という概念は今なお有用であると主張する。そもそも供犠論が混迷したのには、欧米の専門家の関心が、宗教的な祖先であるセム人（ユダヤ）の旧約聖書と言語的な祖先のアーリア人（インド）のヴェーダ祭式における供犠論に始まったことが影響しているという。さらに、ヨーロッパの学術・文化の発祥地ともいえる地中海世界・イスラーム圏の供犠研究も、動物考古学の知見が加わったこともあって興隆している

が、いずれにしても欧米知識人の自我の葛藤に供犠論が付き合わされてきた側面がある。しかし、山田によれば、今や省みられないヴィーン学派の供犠論にも、狩猟民における獵獣の扱いと牧畜民における動物供犠の間に連続性を見出すなど、今日の民族誌研究につながる功績がある。例えば、モイリがギリシャの供犠儀礼にユーラシア北部の狩猟儀礼との類似点を見出したという指摘は興味深い。元々、狩猟民が生きるために動物殺しをしていたときの儀礼が宗教的文脈で様式化したものが供犠であるという。

第8章「狩猟・漁撈教育と過去回帰—内陸アラスカにおける生業の再活性化運動」（近藤祉秋）は、混合経済を営むアラスカ先住民社会で伝統的な生業である狩猟・漁撈の再活性化運動として実践される「文化キャンプ」の取り組み事例を報告している。近藤は、古老の語りに頻繁に聞かれる「いずれ昔の生活に戻るときが来る」というような過去回帰言説に注目する。調査地のニコライ村の場合、古老が実践して若い人に伝えようとする生活様式は自分が幼少時代に親しんだものである。例えば、一昔前まで重要であったカリブーは今や身近な獲物でないため、「動物殺しの循環」としては、ニコライ村の人々との繋がりはすでに失われている。代わって生存の基盤を支える獲物となったヘラジカが「文化キャンプ」における猟と解体方法の実践においても、動物の魂や殺して肉にする際の配慮や敬意の示し方を教える対象となっている。近藤は、カリブーの神話が忘却された現実を否定的に見るのではなく、大きな社会変動の中で、人々が変化に応答しながら、「動物殺し」の技芸と野生動物との関係を次世代に継承している側面を肯定的に見ている。

第9章「優しさと美味しさ—オイラト社会における屠畜の民族誌」（シンジルト）は、歴史的経緯により東アジアから東欧にかけて広大な地域の8カ所に分散し、3世紀以上離れて暮らしてきた牧畜民オイラトが、それぞれの土地で他民族の影響を受けながら三つの屠畜方法（モンゴル式「腹裂き法」、イスラーム式「放血法」、チベット式「窒息法」）を採用するようになったことに注目した。そして、屠畜の実践者が語る肉の美味しさと倫理観を比較考察している。興味深いことに、それぞれの地域のオイラトが、自分たちが行う屠畜方法こそ家畜に優しく、そこで得られた肉が美味しいと確信しているという。特に河南蒙旗オイラトは、イスラーム式の放血した肉よりも自分たちが行う窒息法によって得た血液の濃厚な肉こそ美味であると評する。さらに、その美味しさの根拠がカル・ダム（口を塞ぐ）という屠畜の第一段階にあると考える。彼らのロジックによれば、このカル・ダムこそ知覚を喪失させ痛みを軽減するための措置（＝

優しさ）である。屠畜者は、知覚喪失の確認のため、家畜の目を観察し、外部刺激への反応を検査するという。近年、河南蒙旗に窒息法で屠畜した肉を提供する会社が誕生し、牧畜民に大変な人気を博している。この会社は、解体作業員の家族が過剰殺生に悩まないための配慮まで行っている。気絶まで時間のかかる窒息法は、苦痛の最短化を必須とする欧米流の動物倫理には否定される。しかし、異なる地域のオイラト同士が他地域の屠り方を「怖い」と感じるように、今、世界標準とされつつある動物倫理の基準が本来相対的なものであることを示唆する価値ある報告である。

本書を薦める理由を二点挙げよう。第一に、動物殺しにおける苦痛の扱いを再考する機会が得られるという点である。第1章が展開する論は真新しいものではないが、苦痛除去を以て正当化される殺しが招く危険性をわかりやすくまとめている。第2章で紹介される「現代の棄老伝説」（＝高齢者施設の問題）も根底は同じである。つまり、最初の2章で、苦痛を除去して効率性を追求すれば人間や動物は幸せになるのかという問いが読者に投げかけられる。最後の第9章で、読者は同じ問いに引き戻され、良いヒントを得る。長時間をかけて窒息させる屠畜倫理を実践する会社の成功は、欧米型の屠畜倫理の格好のアンチテーゼとなる。ただし、会社の解体作業員しか屠畜を行わない状況に至ると、欧米と同様に、動物殺しの隠蔽につながる恐れはある。第二に、第4章や第8章が紹介する北方狩猟民の世界観と生活の民族誌は、日本における環境教育の実践においても良い教材となるという点である。世界規模で拡大する工場畜産は人間と動物の関係を引き離し、牧草地や飼料穀物栽培の拡大は地球環境への負荷を増大させている。狩猟民を参考に、人間と動物の命の繋がりを感じながら、野生動物の狩猟実践を次世代に継承することは、この日本においても重要であろう。